

落語によるドメスティック・バイオレンス防止研修の効果

小林 敦子
社会問題調査分析センター

Effects of a *Rakugo* Workshop on Decreasing Domestic Violence

KOBAYASHI Atsuko
SPRAC

The effects of a workshop that used *Rakugo* (classical Japanese comic storytelling performance) on decreasing the tolerance for domestic violence were investigated. Participants ($N = 69$, 23 men and 46 women) attended a workshop held by the local government. Before and after the workshop, the degree of tolerance for domestic violence (TDV) in the participants was assessed by inquiring about their tolerance for domestic violence and their sex role attitudes were assessed by using the short form of the Scale of Egalitarian Sex Role Attitudes. Results of an analysis of variance indicated that post-workshop mean TDV scores were significantly lower than pre-workshop scores; which was independent of the participants' sex role attitudes. These results suggest that *Rakugo* workshops are an effective countermeasure for domestic violence.

1. 問題

ドメスティック・バイオレンスは、日本語訳すれば「家庭内暴力」となるが、特に夫婦間や恋人同士などの親密な間柄で起こる暴力に対して用いられる言葉であり、主に夫（男性）から妻（女性）への暴力を指す。警察庁（2012）の報告によれば、配偶者間の傷害・暴行の被害者の93%が女性であるように、ドメスティック・バイオレンスの被害者は圧倒的に女性が多いからである。また、石川（2005）は某県が県民を対象に実施した膨大な調査データを分析した結果、次のように述べている。

我が国の法律「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」[平成13年4月13日]法31」などではDVは男女双方からの暴力を含意するものとして規定されているものの、実態の上では、男性が妻ないし女性パートナーから受ける暴力被害は僅少で、反面、女性が夫ないし男性パートナーから受ける暴力被害は頻発しており、その上、意識レベルにおいてさえ、概して男性のDV

加害経験率は女性のそれを凌駕しており、事実上、DVは男性から女性に対して向けられる暴力行為をさす現象であると見なされる（p.110-111）。

このように、ドメスティック・バイオレンスは、パートナーである男性から女性へ行われる暴力と、一般的には理解されているようだ。

日本では、婚姻したことのある女性の3人に一人が何らかの暴力被害を受けているが、その半数は誰にも相談していない(宮園, 2009)。ドメスティック・バイオレンスは暴力であるため、「なくすべきもの」という認識を誰もが持っているだろう。この暴力が被害女性の精神状態に及ぼす影響は深刻であることが様々な研究で報告されている(例えば、Howard, Trevillion, & Agnew-Davies, 2010; Fischbach & Herbert, 1997)。しかし、なぜ、多くの被害女性は暴力を振るわれても沈黙しているのだろうか。その理由について、長年にわたりドメスティック・バイオレンス防止に向けた国際的な活動・研究を行ってきた臨床心理士、精神科医、医学博士の小西(2001)は次のよ

うに述べている。

暴力をふるうほうは、自分には暴力をふるうだけの正当な理由があると思っていることが多い。…中略… 夫婦間の暴力の場合も、その暴力の犯罪性、反倫理性は意識されていないことが多い。自分の家では、妻が無能で言うことを聞かないんだから、殴ることも必要なんだと思っている人が、一方でドメスティック・バイオレンスの被害者についての講義を平気で受講するということが十分起こりうると私は思うのである。

妻に暴力をふるったことのない多数派の男性にとって、ドメスティック・バイオレンスの話は、確かに自分とはほど遠い世界の出来事のように感じられるだろうし、暴力を振るわれたことのない女性にとってもそうだろう。そしてふるっている男性は、それが「暴力」であるという認識をもつことがむずかしい。つけ加えると被害にあっている女性も、これを被害であると認識することがむずかしい点では同じである(小西, 2001, p.11)。

ドメスティック・バイオレンスは被害者に対して害を及ぼす恐れのある、紛れもない暴力である。しかし、暴力をふるっている男性に対して、何が暴力にあたるのかを説明し、声高にその防止を叫ばなければならない状況にある。さらに被害者支援の観点からは、被害を受けている女性や暴力の当事者でない第三者に対しても、ドメスティック・バイオレンスは暴力であるという認識を促進する必要があるだろう。

そこで本研究では、ドメスティック・バイオレンスが防止されるべき暴力であって、容認されるべきではないという認識を広めるために研修プログラムを構築し、その実施の効果を測定する。

2. 方法

2.1 落語を使用した研修プログラムの構築

ドメスティック・バイオレンスを行うのはどのような人物であろうか。小西 (2001) は、ドメスティ

ック・バイオレンスの加害者の中にはかたくなな男性中心主義の価値観を持っている場合があると述べている。また、ドメスティック・バイオレンス研究の近接領域では、田中 (1997) や Pryor (1987) により、セクシュアル・ハラスメントと性役割態度、女性へのステレオタイプとの関連が確認されている。

また、ドメスティック・バイオレンス被害を受けても黙っている女性はどうのような女性だろうか。小西 (2001) は、日本は男女差別の根強く残っており、被害に遭っても黙っていること、忍耐することが美德だとする風潮もあると指摘している。

これらの研究を外観すると、ドメスティック・バイオレンスの容認は、男性中心主義、男女差別、固定的な性役割観、女性へのステレオタイプの強さと関連があると考えられるだろう。

それでは、ドメスティック・バイオレンスに関する研修は、どのようなものが有効であろうか。小林 (2011) では、ジェンダー・ハラスメントに関する研修を通常の講義形式により実施し、その研修効果が確認されたが、男女の固定的な役割観を持っている女性に対しては、当該研修の効果がなかった可能性のあることが推測された。その結果を受けて小林・田中 (2012) では、固定的な性役割観を有する女性に対しても、そうでない女性に対しても一様に有効となるように、日本の古典芸能である落語の手法を用いたジェンダー・ハラスメント研修プログラムを構築し、その効果が検証された。

ドメスティック・バイオレンスに関してもジェンダー・ハラスメントと同様の研修手法が有効であることが推測されるため、本研究においても落語を用いた研修プログラムを構築し、その研修効果を検討することとする (Photo.1)。



Photo.1 講座の様子(主催者提供)

2.2 研修の実施時期および内容

講座に使用される落語は、東北、関東甲、中部、関西方面で数多くの講師実績を持つ男女共同参画落語創作・口演家により創作され、自ら口演された。講座の内容は、自己紹介および落語(60分)、グループ討議、発表(30分)、流行歌を交えた内容解説(30分)であり、計2時間程度であった。

本研究の対象となった創作落語「ドメスティック・バイオレンス」講座は、平成24年11月に地方自治体A町、B市、C県によって、それぞれ実施された。主催者であるA町、B市、C県に対しては、事前に創作落語家を通じて質問紙調査の実施を依頼し承諾を得た。調査は、予め作成・準備されたドメスティック・バイオレンス容認度尺度(TDV)等を用いた。それぞれの講座の参加者に対し、受講の前後に質問紙調査票の回答を求め、受講前後の回答の変化によりドメスティック・バイオレンスに対する容認の程度を比較した。

回収された回答は69件で、内訳はA町23件、B市17件、C県29件であった。

2.3 調査項目

2.3.1 ドメスティック・バイオレンス容認度尺度

この尺度は、回答者自身がドメスティック・バイオレンスの当事者である(あった)かどうかに関係なく、ドメスティック・バイオレンスに該当する行為それ自体に対する認識を問うものである。過去に行われたドメスティック・バイオレンスに関する質

問紙調査を回顧しながら、ドメスティック・バイオレンスに該当する行為に対する容認尺度項目を作成した。この尺度では、男性から女性への暴力に限定せず、男女双方向で回答可能な質問項目とした。尺度を構成する項目は「手を出さない限り、暴力にはあたらない」「配偶者を叩くのは、愛情があるからだ」「配偶者に暴力をふるわれる人は、その人にも責任がある」などの10項目で構成され、それぞれ「全くそう思わない」～「全くそう思う」の5段階で評定を求め、それぞれ1～5点が配点される(得点範囲:5点～50点)。得点が高いほどドメスティック・バイオレンスに該当する行為を容認し、暴力にはあたらないという認識をもっていると判断される。

2.3.2 平等主義的性役割態度短縮版 (SESRA-S)

男女の固定的な役割観を測定するために、鈴木(1994)の平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)を用いた。鈴木(1994)によれば、「性役割」は、「男女にそれぞれふさわしいとみなされる行動やパーソナリティに関する社会的期待・規範およびそれらに基づく行動」を意味し、「性役割態度」は、性役割に対して、一貫して好意的もしくは非好意的に反応する学習した傾向である。また、「平等主義」とは、「それぞれ個人としての男女の平等を信じること」である。SESRA-Sは、これらの定義に従って作成されている。この尺度は、「女性は、家事や育児をしなければならないから、フルタイムで働くよりパートタイムで働いた方がよい(逆転項目)」などの15項目から構成され、5段階評価により評定される(得点範囲:15～45)。得点が高いほど、平等的な性役割態度を有していることを示す。

2.3.3 デモグラフィック特性

そのほか、デモグラフィック特性に関する設問として、性別や年齢および一日の家事育児介護時間数について回答を求めた。なお、年齢については、回答のしやすさを考慮して、「45～50歳」というように、20歳から5歳刻みに11段階で評定された。

3. 結果

3.1 基本統計量

回答者の年齢の最頻値は、60～65歳で全体の24.6%を占め、次いで55～60歳が13%と多かった。性別は男性23名、女性46名であった。

男性の一日のうちの家事育児介護に費やされる時間は0～1時間が最も多く11名で全体の47.8%を占め、次いで1～2時間が6名で26.1%を占めていた。これに対して、女性の一日のうちの家事育児に費やされる時間は3～4時間が最も多く13名で全体の28.3%を占め、次いで4～5時間が11名で23.9%を占めていた。

受講前のドメスティック・バイオレンス容認度の尺度得点は、10項目の合計得点により合成された。平均値20.403、標準偏差6.200であった。尺度の信頼性を求めるために α 係数を求めたところ.771となり、内的一貫性が確認された。研修終了後の得点は、平均値17.255、標準偏差5.444であった。尺度の信頼性を求めるために α 係数を求めたところ.787となり、内的一貫性が確認された。

SESRA-Sの尺度については、平等的であるほど得点が高くなるよう逆転項目の得点を逆転し、15項目の合計得点を算出した。その結果、平均値58.525、標準偏差8.174であった。尺度の信頼性を求めるために α 係数を求めたところ.785となり、内的一貫性が確認された。

3.2 妥当性の確認

前述のとおり、ドメスティック・バイオレンスの容認は、男性中心主義的、男女差別的、固定的な性別役割観、女性へのステレオタイプの強さと関連があると考えられるだろう(例えば、田中, 1997; Pryor, 1987; 小西, 2001)。そこで、ドメスティック・バイオレンス容認度尺度の妥当性を確認するために、SESRA-Sとの相関係数を算出し、関係性の有無を確認する。その結果、ドメスティック・バイオレンス容認度尺度とSESRA-Sとの相関係数は $r = -.554$ ($p < .001$)となり、負の相関が確認された。

また、暴力の被害者は男性に比して女性が顕著に高い(石川, 2005; 警察庁, 2012)ことから、ドメスティック・バイオレンスに該当する行いが暴力であるということに対する理解は、男性よりも女性の方が高いことが推測される。そこで性別により研修前のドメスティック・バイオレンス容認度に違いがある

かどうか検討するために、 t 検定を行った。その結果、 $t = 3.126$ ($p < .01$)となり、男性よりも女性の方がドメスティック・バイオレンスに該当するような行為を容認しないことが確認された。Fig. 1に結果を示す。

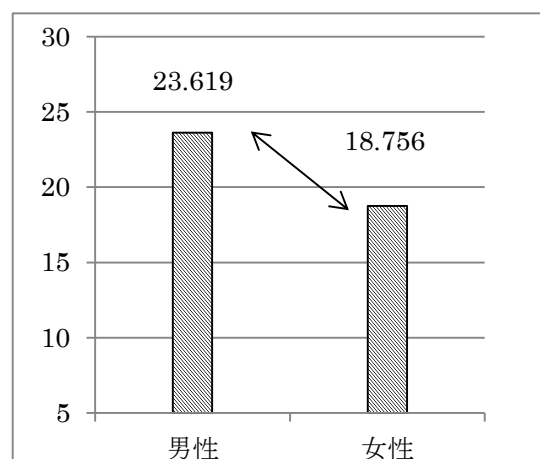


Fig. 1 性別によるドメスティック・バイオレンス容認度得点の違い

これら2つの分析結果から、本研究で使用された尺度は一定の妥当性を有しているということが確認された。

3.3 研修効果の分析

3.3.1 性別の違いによる研修効果の検討

男女共同参画に関する研修では、受講者の性別により研修効果に差がでる可能性がある。そこで、受講者の受講前後の変化と同時に、受講者の性別が研修効果に影響をもたらすかについて検討する。本分析では、回収された69件の回答のうち、性別および受講前と受講後の回答が揃わなかった回答を除去し、残りの52件が対象とされた。

被験者を性別(男性:14名、女性:38名)に分け、2要因(男・女×受講前・後)の混合モデルによる分散分析による検討を行った。

分析の結果、性別×受講前後の交互作用 ($F = .223$, $n.s.$) は有意とならず、男女の違いによる主効果が有意となり ($F = 12.400$, $p < .001$)、受講前後の主効果も有意となった ($F = 13.950$, $p < .001$)。男女と受講前後のド

メスティブ・バイオレンス容認度得点の平均値の変化を Fig. 2 および Table. 1 に示す。

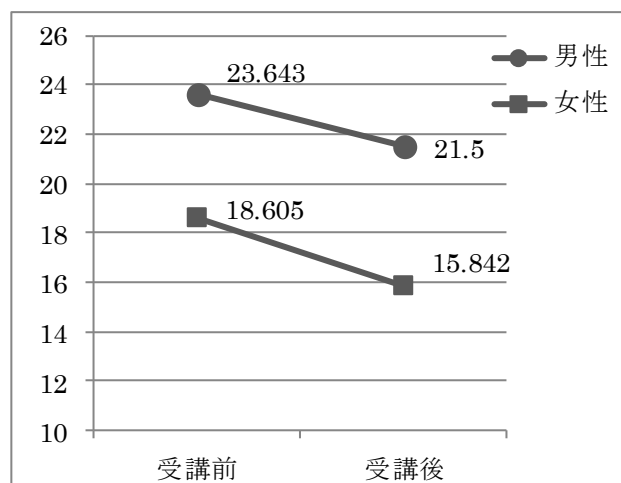


Fig. 2 ドメスティブ・バイオレンス容認度の受講前後の変化（性別の違いによる）

Table. 1 ドメスティブ・バイオレンス容認度の受講前後の変化（性別の違いによる）

	受講前の平均値 (標準偏差)	受講後の平均値 (標準偏差)
男性 (N=14)	23.643 (6.234)	21.500 (5.958)
女性 (N=38)	18.605 (5.395)	15.842 (4.523)

3.3.2 性役割に対する価値観の違いによる研修効果の検討

男女共同参画に関する講義形式の研修は、性役割に対する価値観の違いがその効果に影響を及ぼす可能性があるとして指摘されているが、落語による研修では、そのような受講者の価値観に左右されず一律に有効であるとの報告がある (小林・田中, 2012)。そこで、ここでは受講者の受講前後の変化と同時に、固定的な性役割観の違いが研修効果に影響をもたらすかについて検討する。本分析では、回収された 69 件の回答のうち、SESRA-S の得点および受講前と受講後の調査項目が揃わなかった回答を除去し、残りの 45 件が対象とされた。

まず、SESRA-S の得点の高さが研修効果にどのような影響を及ぼしていたか確認するために、SESRA-S の得点の中央値により被験者を高・低の 2 つの群(高群: 23 名、低群: 22 名)に分け、2 要因 (SESRA-S) の高・低×受講前・後) の混合モデルによる分散分析による検討を行った。

分析の結果、SESRA-S × 受講前後の交互作用 ($F=2.112, n.s.$) は有意とならず、SESRA-S の高・低群の違いによる主効果が有意となり ($F=8.405, p<.01$)、受講前後の主効果も有意となった ($F=18.106, p<.001$)。SESRA-S の得点の高群と低群の受講前後のドメスティブ・バイオレンス容認度得点の平均値の変化を Fig. 3 および Table. 2 に示す。

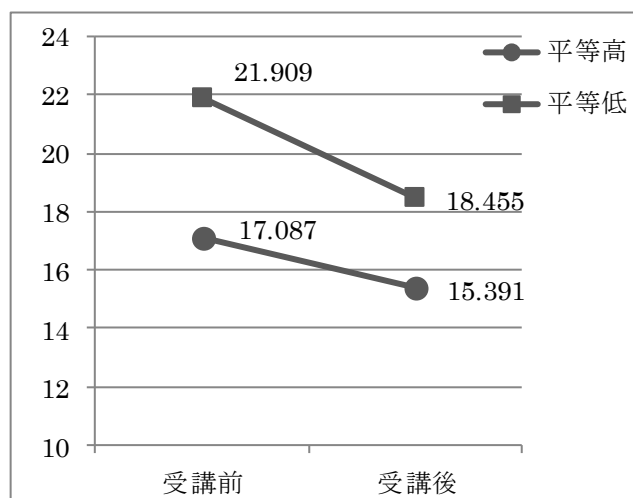


Fig. 3 ドメスティブ・バイオレンス容認度の受講前後の変化（平等主義的性役割態度高群・低群による）

Table. 2 ドメスティブ・バイオレンス容認度の受講前後の変化（平等主義的性役割態度高群・低群による）

	受講前の平均値 (標準偏差)	受講後の平均値 (標準偏差)
SESRA-S 高群 (平等主義的性役割態度) (N=23)	17.087 (5.791)	15.391 (4.784)
SESRA-S 低群 (N=22)	21.909 (4.219)	18.455 (5.012)

4. 考察

4.1 受講者の属性

受講者の年齢は 60 から 65 歳が最も多く、比較的年齢の高い層に分布が偏っていたことから、そのほかの年齢層をターゲットとした場合の研修効果の有無も今後の検討課題となるだろう。

1 日における家事育児時間の回答を求めたところ、男性が 0~1 時間に対し、女性は 3~4 時間であった。年齢的にはサラリーマンであればリタイヤした世代が多く含まれていると予想されるが、依然、女性がほとんどの家事を担っていることが示された。

4.2 ドメスティック・バイオレンス容認度尺度の妥当性

ドメスティック・バイオレンスに対する容認度の妥当性を確認したところ、平等的な価値観が高いほど、男性よりも女性の方が、ドメスティック・バイオレンスの行為を容認しないという結果となった。これらの結果は、本研究で想定しているドメスティック・バイオレンスの様相と一致するものであり、このことから使用された尺度は一定の妥当性を有していたといえるだろう。

4.3 創作落語「ドメスティック・バイオレンス」の研修効果の検定

本研究では、ドメスティック・バイオレンスが容認されるべきではないという認識を高めるため、先行研究の知見を踏まえ、古典芸能の手法を取り入れた創作落語による研修の効果を検討することを目的とした。研修は様々なバックグラウンドを持つ受講者に対して有効であることが望ましいため、その効果が性別や固定的な性役割観の違いに依存せず及ぼされるかどうかについて検討された。

分散分析の結果、性別と受講前後の交互作用が有意とならなかった。このことは受講の効果は性別と無関係であることを示す。さらに、性別と受講前後の主効果が有意となったことから、性別に区別なく、男女どちらにも受講の効果があったことが示された。

また、SESRA-S の高・低と受講前後の交互作用は有意とならなかった。このことは受講前と後との関係に、受講者がもともと持っている性役割に関する

価値観とは無関係ということを示す。さらに、SESRA-S と受講前後の主効果が有意となったことから、もともと性役割に平等的な価値観をもっている受講者は平等的でない受講者よりもドメスティック・バイオレンスに該当する行為が容認されるべきではないという認識が高いということ、また、受講前と後との関係では、性役割に平等的な価値観をもっているかどうかは区別なく、一律に受講の効果があったことが示された。

以上のことから、創作落語「ドメスティック・バイオレンス」は、性別や個人の性役割観によらず、一般的に効果があったといえるだろう。

4.4 本研究の限界と今後の課題

年齢や職業の有無などをはじめとする個人の属性に関しては、今回はサンプルの都合から分析に組み込むことができなかった。本講座がさらに多様な人々に対して一律に有効であることをいうためには、今後はさらに多くのサンプルを収集し検討される必要があるだろう。また、今回データを取得したのは、受講前後の 2 回のみであった。したがって、研修の効果の持続性については、今後は一定期間後に同内容の調査を実施するなどにより検討される必要があるだろう。

また、今回の研修では、受講者が比較的年齢の高い層に分布が偏っていた。ドメスティック・バイオレンスの研修の効果を確認するために、今後、幅広い年齢層を対象に研修を実施し、その効果を検証することが求められるだろう。

最後に、本研究において落語を使用した研修の効果が受講者の性別や固定的な性役割観に依存しないことが認められたが、従来の講義形式による研修の効果と今回用いた落語による研修の効果の違いについては、さらに検討を重ねる必要があるだろう。

5. 引用文献

- Fischbach, R. L., & Herbert, B. (1997). Domestic violence and mental health: correlates and conundrums within and across cultures. *Social Science Medicine* 45, 1161-1176.
- Howard, L. M., Trevillion, K., & Agnew-Davies, R.

- (2010). Domestic violence and mental health.
International Review of Psychiatry, **22**, 525-534.
- 石川義之 (2005) . ドメスティック・バイオレンス
調査の統計解析[1] —男性調査を中心にして—
大阪樟蔭女子大学人間科学紀要, **4**, 105-127.
- 警察庁 (2012). 平成 23 年の犯罪情勢.
- 小林敦子 (2011). ジェンダー・ハラスメントに関する
心理学的研究 —就業女性を対象として— 日
本大学大学院総合社会情報研究科博士論文 (未公
刊) .
- 小林敦子・田中堅一郎 (2012). 落語によるジェンダ
ー・ハラスメント研究の効果の検討 — 平等主義
的性役割態度の観点から — 日本大学大学院総
合社会情報研究科紀要, **13**, 97-102.
- 小西聖子 (2001). ドメスティック・バイオレンス
白水社.
- 宮園久栄 (2009) . 安全、犯罪と暴力 国立女性教
育会館・伊藤陽一 (編) 男女共同参画統計デー
タブック ぎょうせい. Pp. 145-159.
- Pryor, J. B. (1987). Sexual harassment proclivities in
men. *Sex Roles*, **17**, 269-290.
- 鈴木淳子 (1994). 平等主義的性役割態度スケール
短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究, **65**, 34-41.
- 田中堅一郎 (1997). セクシャル・ハラスメントに関
する心理学研究(2) —セクシャル・ハラスメント評
定尺度作成の試み— 国際経済論集(常葉学園浜
松大学), **4**, 191-202.

(Received:May 31,2013)

(Issued in internet Edition:July 1,2013)